

ウイグル文シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書補遺

松 井 太

はじめに

さきに筆者は、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部(以下、SPFと略)に所蔵される古ウイグル語文献から計58点の文書断片をとりあげ、これらの文書群が共通の歴史的背景を有しており、13世紀中葉にトゥルファン盆地のトヨク(吐峪 ~ Toyoq < uig. Tiyog < chin. 丁谷)石窟近辺で活動していたある特定のウイグル仏教徒集団に関係することを論証した。そして、これらの文書群を、文書中に頻出する2人の仏僧シヴシドゥ(Sivšidu < chin. 修士奴)・ヤクシドゥ(Yaqšidu < 薬師奴)にちなんで「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書」と命名した[松井 2004]。

ところがその後、前稿で扱った58点(断片を接合すれば52件)以外にも、やはり「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書」に属するウイグル語文書がSPF所蔵文献に存在し、そのいくつかは既に写真複製まで公開されていることを知り得た。筆者の未熟ゆえに前稿でこれらの文書に言及できなかったことは、まことに遺憾である。そこで本稿では、これらの文書から既公開の断片群を中心としてとりあげ、前稿に示した情報や考察を補完する⁽¹⁾。

1. 文書の概要

筆者が新たにシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とみなすのは表1に掲げる9点である⁽²⁾。これらの文書には、前稿でとりあげたシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書と共通する人名が現われ、あるいは本来のオモテ面漢文仏典の同定箇所からも既知のシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書との接合関係が確認できる[cf. 松井 2004, pp.53-59]。以下にその内容を整理する。

3Kr 7-25：この断片のウイグル文のほとんどは年月日記載のみの題記である。登場する人名はタイソ(Tayso < 大蔵)・ブヤン=クリ(Buyan-Quli)2名のみで、彼らはその他のシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書には確認されていない。しかし、本来のオモテ面の漢文仏典の同定箇所から、下記

(1) あわせて前稿の誤りを訂正しておく。前稿[p.54]の表1に掲げた4bKr 187aのオモテ面漢文仏典の同定箇所は『十地經論』(T. Vol. 26, No. 1522, 180a09-180a18)が正しい。

(2) 表1の9件のうち、Дх 3650, Kr IV 395, Kr IV 367についてはPeter Zieme (BBAW)・Abdurishid Yakup 両氏より種々の情報をご教示いただいた。また、3Kr 7-25 および Kr IV 252 の写真複製の公開については(財)東洋文庫より許可を得た。特記して深謝する。

表 1

	文書番号	Sivšidu	Yaqšidu	その他の人名	オモテ仏典の經名	『大正藏』卷/經番/頁数	
①	3Kr 7-25			Tayso, Buyan-Qulī	妙法蓮華經	9	262 060b02-060b16
②	Дx 3224	Sivšidu	Yaq[šidu?]	Kuyšidu, Kinšidu	妙法蓮華經	9	262 060b16-060b29
③	Дx 3225			Pusardu-tutung	妙法蓮華經	9	262 048b17-048b29
④	Дx 3226	Sivšidu	Yaqšidu	Kuyši-du, Pusardu(-qul)-šäli, Tiginä	放光般若經	8	221 081c09-081c23
⑤	Дx 3650		Yaqšidu		道神足無極變化經	17	816 813c02-813c06
⑥	Дx 3652				大般涅槃經	12	375 683a11-683a14
⑦	Дx 3654		Yaqšidu	Äsänčim, Tükälä, Tuymiša, Barinč-Qiz, Kimqaŋu-šilavanti, Šinvapdu-šilavanti = 善法奴尸羅	放光般若經	8	221 025a23-025a30
⑧	Kr IV 395			Sambodu-šäli, Pusardu-Qya, Ötüš-šäli, Čiti	(ウイグル語仏典)		
⑨	Kr IV 367			Singdu-toyın, Pinguy, Šinmi-šäli, Toŋo-šäli	(ウイグル語仏典)		

Дx 3224 と直に接合することが判明するので[接合図(1)参照]新たにシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とみなすことができる。

Дx 3224 : 人名シヴシドゥが確認でき、さらにシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書に頻出するクイシドゥ (Kuyšidu < 恵師奴)・キンシドゥ (Kinšidu < 賢師奴)らが現われる。

Дx 3225 : シヴシドゥ・ヤクシドゥは登場しないが、プサルドゥ (Pusardu < 菩薩奴)都統が現われる。このプサルドゥ都統は、やはりシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書に頻出する人名プサルドゥ = シェリ (Pusardu-šäli) またはプサルドゥ = タズ (Pusardu-Taz) のいずれかに比定される可能性が高い。

Дx 3226 : シヴシドゥ・ヤクシドゥの両名に加え、クイシドゥ、プサルドゥ = シェリ、ティギネ (Tiginä)らが登場する。また、オモテ面漢文仏典『放光般若經』の同定箇所 (T. Vol. 8, No. 221, 081c09-081c23) やウイグル文の筆致・行配置から、前稿で「準シヴシドゥ・ヤクシドゥ文書」とみなした Дx 9535 + 9536 と同一写本の近接する部分と判明する[松井 2004, p.58; 接合図(2)参照]。

Дx 3650 : 題記の筆者としてヤクシドゥが現われる。またオモテ面の漢文仏典『道神足無極變化經』の同定箇所 (T. Vol. 17, No. 816, 813c02-813c06) から、シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書の Kr IV 252 + Дx 12145 と直に接合することが判明する[接合図(3)参照]。さらに lines 11-17 によれば、このウイグル文題記はヤクシドゥが「阿弥陀窟 (abita qur) という名の寺院 (varxar) で、常に登り敬礼したとき」作成したものという。すでに前稿で論じたように、「阿弥陀窟寺 (abita qur varxar ~ sāngrām)」はトヨク石窟所在の寺院であり、シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書の多くはこの寺院で作成された[松井 2004, pp.63-68]。上述の銘文からは、シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書の中心人物ヤクシドゥが日常的に阿弥陀窟寺に参詣していたことが示唆され、彼らトヨク石窟の仏教徒集団が阿弥陀窟寺を活動拠点としていたことがあらためて確証される。

Дx 3652 : ウイグル文は「犬年正月二十三日に (it yil aram ay üč otuz-qa)」という年月日記載と袋文字の「私 (män)」という文面のみだが、オモテ面の漢文仏典『大般涅槃經』の同定箇所

接合図(1) 3Kr 7-25 + Dx 3224 『妙法蓮華經』(T. Vol. 9, No. 262, 060b02-060b29)

Dx 3224

3Kr 7-25

聽我等分得出家所以者何諸佛難值時亦
 難遇彼時妙莊嚴王後宮八萬四千人皆悉
 堪任受持是法華經淨眼菩薩於法華三昧
 久已通達淨藏菩薩已於無量百千萬億劫
 通達離諸惡趣三昧欲令一切眾生離諸惡
 趣故其王夫人得諸佛集三昧能知諸佛秘
 密之藏三子如是以方便力善化其父令心
 信解好樂佛法於是妙莊嚴王與群臣眷屬
 俱淨德夫人與後宮婦女眷屬俱其王三子
 與四萬二千人俱一時共詣佛所到已頭面
 禮足繞佛三匝却住一面爾時彼佛為主說
 法示教利喜王大歡悅爾時妙莊嚴王及其
 夫人解頸真珠璽格價直百千以散佛上於
 虛空中化成四柱寶臺臺中有大寶床數百
 千萬天衣其上布佛結加趺坐放大光明爾
 時妙莊嚴王作是念佛身希有端嚴殊特成
 就第一微妙之色時雲雷音宿王華智佛告
 四眾言汝等見是妙莊嚴王於我前合掌立
 不此王於我法中作比丘精勤修習助佛道
 法當得作佛號婆羅樹王國名大光功名大
 高王其娑羅樹王佛有無量菩薩眾及無量
 聲聞其國平正功德如是具王即時以國付
 弟與夫人三子并諸眷屬於佛法中出家修
 道王出家已於八萬四千歲常勤精進修行
 妙法華經過是已後得一切淨功德莊嚴三
 昧即昇虛空高七多羅樹而白佛言世尊此

接合図(2) Dx 3226 + Dx 9535 + 9536 『放光般若經』(T. Vol. 8, No. 221, 081c09-081c23)

Dx 3226

Dx 9535 + 9536

三善所以者何善男子是阿耨多羅三三昧
 若非可善者何以故能法之相持念等須
 菩提曰佛言世尊善哉摩訶薩甚善甚善於空
 無相無相之法發阿耨多羅三三昧善時
 欲得阿惟三佛佛言如是須菩提善薩甚謙
 善於空無之法發阿耨多羅三三昧善得阿
 惟三佛須菩提是菩薩為世間故欲念世間
 安隱世間欲救世間一切眾生以業生故發阿耨多
 羅三三昧善為世間歸為世間作護為世
 間作燈明故發阿耨多羅三三昧善為世
 發阿耨多羅三三昧善須菩提云何善薩
 為諸眾生發阿耨多羅三三昧善度脫五道
 安隱眾生無畏岸出於泥洹以是故為世
 間發阿耨多羅三三昧善云何善薩欲安隱

081c13の「相」, 081c18-081c20の
 「為世間作將為世間導為世間舍為世間趣故」を誤脱

接合図(3) Dx 12145 + Kr IV 252 + Dx 3650
 『道神足無極變化經』
 (T. Vol. 17, No. 816, 813b19-813c06)

Dx 3650

Kr IV 252

Dx 12145

來則我身是業於彼世界以法而教導如是
 日蓮名為如來道神足無極之變化也一切諸
 弟子緣一覺所不及知
 復次日蓮於是三千大千刹土西南方去是
 四天下世界七萬四天下世界其世界名比
 寶殿頂寶殿有八萬國國王一天下有八萬
 城城外有八萬聚落八萬王所治處八萬城
 八萬四千小城一處城聚落處處小城拘
 利百千皆滿其中彼諸王皆奉行法非法之
 事皆悉除盡是諸土各有八萬四千夫人嫁
 女爾時嫁女端正世之最上一諸王各有
 五百太子一諸土各有萬二千女是萬二
 千女皆端正於世最上諸王法無難杖亦
 無兵器是諸王各自治在其國日蓮彼容
 受世界佛號波勿多羅陀那頌比相薩阿闍
 阿羅訶三耶三佛言寶放光明(來無所
 著等正覺現在說法彼如來自日蓮得阿耨多

接合図(4) Kr IV 250 + Dx 3652 『大般涅槃經』
 (T. Vol. 12, No. 375, 682c26-683a14)

Dx 3652

Kr IV 250

大乘大般涅槃因八聖道見一切法所謂常
 無常有為無為有樂生非樂生非物非物苦樂
 我無我淨不淨煩惱非煩惱業非業實不實
 乘非乘知無知陀羅驪非陀羅驪求那非求
 那見非見色非色道非道解非解善男子善
 薩如是住於大乘大般涅槃觀道聖諦
 迦葉菩薩白佛言世尊若八聖道是道聖諦
 義不相應何以故如來或說信心為道能度
 諸漏或時說道不放逸是諸佛世尊不放逸
 故得阿耨多羅三三昧二善提亦是菩薩助道
 之法或時說言精進是道如古阿難若有人
 能勤修精進則得成就阿耨多羅三三昧二善
 提或時說言觀身念處若有繫心精勤修習
 是身念處則得成就阿耨多羅三三昧二善提
 或時說言正定為道如告大德摩訶迦葉夫
 正定者摩訶薩是道非正定而是道也若水

(T. Vol. 12, No. 375, 683a11-683a14)から、前稿でシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書として言及した Kr IV 250 と直に接合する[接合図(4)参照; cf. 松井 2004, p.62].

Дx 3654 : 題記の筆者としてヤクシドゥ、またキムカドゥ (Kimqaṭu < 金華奴) 律師が書簡の草稿部分の筆者として登場する。

Kr IV 395v : この断片は楷書体ウイグル語仏典の紙背を二次利用したものである。シヴシドゥ・ヤクシドゥは登場しないが、サムボドゥ (Sambodu < 三宝奴)・ブサルドゥなどシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書と共通する人名がみえる。また ²män pusardu qy-a bu ³abita qur-ta ⁴iki ay qy-a turup ⁵birü tägindim ärti 「私ブサルドゥめがこの阿弥陀窟 (abita qur) に 2 ヶ月ほど確かに滞在し奉ったのであった」というウイグル銘文から、この断片は阿弥陀窟 (寺) で作成されたと考えられ、やはりシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書との関係がうかがえる。

Kr IV 367v : この断片は と直に接合する。その他にも、やはり仏教的人名・称号を有する人物が登場する：シングドゥ = トイン (Singdu-Toyın; Singdu < 僧奴), ピングイ (Pinguy < 斌惠 (?)), シンミ = シェリ (Šinmi-šäli; Šinmi < 善明 (?)), トコ = シェリ (Toqo-šäli; Toqo < 道光 (?))。

以上の諸点から、この 9 点をシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とみなすことに問題はない。また、
~ は敦煌 (Дуньхуан) 出土資料を示す Дx 番号をもつが、これはおそらく SPF での整理ミスの結果であり、既知のシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書中の Дx 文書の諸例と同じくトゥルファン地域将来資料と訂正すべきである [cf. 松井 2004, pp.58-59].

2. テキスト・和訳・語註

上記 ~ のうち、については Abdurishid 氏が校訂・研究を準備中であり、その公刊を鶴首する。また前述のように、にはあらためて校訂を要するテキストはほとんどない。そこで、以下には ~ , の 6 件について校訂テキスト・和訳・語註を提示する。なお筆者は原文書を未だ実見していないので、紙寸・紙色など古文書学的情報の提示は他日を期す。

+ 3Kr 7-25 + Дx 3224 verso

[写真] DhSPB 10, p.230.

[備考] 漢文仏典『妙法蓮華経』(T. Vol. 9, No. 262, 060b02-060b29) 紙背の二次利用。3Kr 7-25 (lines 1-13) に Дx 3224 (lines 14-26) が直接後続する。

- 1 tonguz yil aram ay
- 2 bu tavṛač kün-tä män tayso []
- 3 tonguz yil aram ay []

4	tonguz yil aram ay (...)[]
5	tonguz yil aram ay (..) (...)[]
6	tonguz yil aram ay bir ygrmikä []
7	tonguz yil aram ay bir ygrmikä []
8	tonguz yil bišinč ay biš otuz qa []
9	(..) yil bišinč buyan qulï []
10	[] tu rup ür ky-ä []
11	[] (..) [] (.) üç(?) []
12	[] (..)Y üç(?) tutung []
13	[] (.)č (..)ay buyan []

14	tonguz yil aram ay üç otuz- qa []
15	it yil it yil []
16	kuyšidu tutung qay-a (.)[]
17	kuyšidu tutung []
18	-tä • män kinšidu tutung-qa yač šidu ? []
19	tonguz yil ikinđi ay []
20	kuyšidu tutung iri kíp [] bitiyü
21	tägintim ödig bolzun []
22	tonguz yil aram ay bir ygrmikä män sivšidu []
23	tonguz yil aram ay bir ygrmikä män sivšidu []
24	bitidim čin ol munï bitig-tä[]
25	tonguz []
26	män sivšidu šäli bitidim čin ol []
	[missing]	

- 1 猪年正月
- 2 この漢文の卷子に、私タイソ
- 3 猪年正月
- 4 猪年正月
- 5 猪年正月
- 6 猪年正月十一日に .
- 7 猪年正月十一日に .
- 8 猪年第五月二十五日に .

- 9 年第五 ブヤン=クリ
 10 [残]って、永らく
 11 3(?)
 12 3人の(?)都統
 13 第 月, ブヤン

- 14 猪年正月二十三日に .
 15 犬年 犬年
 16 クイシドゥ都統め
 17 クイシドゥ都統
 18 で, 私キンシドゥ都統に, ヤクシドゥ(?)
 19 猪年第二月
 20 クイシドゥ都統が心を痛めつつ [書き]
 21 奉った. 記念となるように .
 22 猪年正月十一日に. 私シヴシドゥ
 23 猪年正月十一日に. 私シヴシドゥ
 24 私が書いた. 真である. これを書に
 25 猪
 26 私シヴシドゥ = シェリが書いた. 真である .
 [後 缺]

[語註]

1v24, bitig: 既公刊の写真では不鮮明. -T- の円弧は小さく, 末字も -K ではなく -Z / -N のようにみえるので, 他の語の可能性もある.

Дx 3225 verso

[写真] DhSPb 10, p.230.

[備考] 漢文仏典『妙法蓮華經』(T. Vol. 9, No. 262, 048b17-048b29)紙背の二次利用.

- 1 bars yil bišinč ay bišyangī bišinč
- 2 bars yil altinč ay iki otuz-qa män pusardu
- 3 tutung qay-a bitiyü tägintim čin ol munī bitimiš-tä

- 1 虎年第五月初(旬の)五日 第五
- 2 虎年第六月二十二日に・私ブサルドウ
- 3 都統めが書き奉った・これを書いたときに

[語註]

3v1-2: 前稿で示したシヴシドウ・ヤクシドウ関係文書のうち、虎年に紀年されるものは1件(4bKr 71)のみであった。本文書により虎年紀年の例が増加した点は重要である。

Дx 3226 + 9535 + 9536 verso

[写真] Дx 3226: DhSPB 10, p.231; Дx 9535 + 9536: DhSPB 14, p.173.

[備考] 漢文仏典『放光般若經』(T. Vol. 9, No. 221, 081c09-081c23)紙背の二次利用・行配置や筆致から、lines 1-10についてはA、Bに分類できる。

[missing]

- | | | | |
|---|----|--|--------------------------------|
| A | 1 | quḥbutī bu ta turzun [|] |
| A | 2 | qulutī sivšidu tutung [|] tavγač kūn-tā bitidim |
| B | 3 | mān yaqšidu tutung [|] kimqaṭu |
| A | 4 | mān yaqšidu tutung bitiyü tāgintim čin ol munī | |
| B | 5 | kuyši-du KW(..)Y | |
| B | 6 | mān sivšidu tutung bitiyü tāgintim čin ol munī bitimiš-tā | |
| A | 7 | bitimiš pusardu šāli tiginā sivšidu [|] tutung bar {ödig} |
| B | 8 | pusardu qul šāli tiginā qal sivšidu [|] tutung |
| A | 9 | ärti munča kiši-ning özkintä[|]m ödig bolmaz- |
| A | 10 | -un bolmasa bolmazun [|](.....) |
| | 11 | bu bu tavγač {::} kūn-tā mān (..)[|] |
| | 12 | bitidim P munī bitimiš-tā P [|] |
| | 13 | yaqšidu tutung bir-lä PW [|] |
| | 14 | tonguz yil säkizinč ay altı ygr mikā [|] |
| | 15 | tutung qay-a iki kāšig ödiglätim [|] |

[missing]

[前 缺]

- | | | |
|---|---|-------------|
| A | 1 | 僕 この 残るように。 |
|---|---|-------------|

- A 2 僕シヴシドゥ都統 [漢]文の卷子に私が書いた。
 A 4 私ヤクシドゥ都統が書き[奉った・真]である。これを
 A 7 書いた(時に)プサルドゥ=シェリ, ティギネ, シヴシドゥ 都統が居
 A 9 たのであった。このような人の面前で 私は した。記念と
 A 10 なるな。ならないのならなるな。

- B 3 私ヤクシドゥ都統 キムカドゥ
 B 5 クイシドゥ
 B 6 私シヴシドゥ都統が書き奉[った・真である]。これを書いた時に
 B 8 プサルドゥ=クル=シェリ, ティギネ=クル, シヴシドゥ 都統

- 11 この この漢文の卷子に私
 12 私が書いた。これを書いた時に
 13 ヤクシドゥ都統と共に
 14 猪年第八月十六[日に]
 15 都統めが2行を記した。
 [後 缺]

[語註]

4v1, bu ta: 頻出する bu tavṛaç kün-tä「この漢文の卷子に」という表現を書こうとして途中で止めたものか。

4v8, qal: qul 「奴, 僕」の誤記とみる。語註 **5v16** も参照。

4v12, P: bu 「これ」を書きかけたが, 途中で止めて munī 「これを」に改めている。

Дx 12145 + Kr IV 252 + Дx 3650 verso

[写真] Дx 12145: DhSPB 16, p. 46; Дx 3650: DhSPb 11, p.12.

[研究]松井 2004, p.66 (Дx 12145²⁻³, Kr IV 252²⁻³)

[備考]漢文仏典『道神足無極變化經』(T. Vol. 17, No. 816, 813c02-813c06)紙背の二次利用。
 Дx 12145(lines 1-3) Kr IV 252(lines 4-10) Дx 3650(lines 11-19)の順で直に接合する。なお, line 11の一部はKr IV 252, Дx 3650の双方にまたがって書かれる。

- 1 道神足變化經
- 2 bu tavṛaç kün-tä män pusardu šäli bitiyü **tägingtim**

3 čin'ol ašun ärmäz ol küskü

4 küskü yil bišinč bu tavγač kün-tä
5 tavγač kün-tä bitimäk tamuluq bolγu qilinč ol tip
6 saqinip män čintso atay qumaγ bitidim čin'ol ašun ärmäz
7 küskü yil törtünč ay altı otuz-qa qulutı kuyşıtu tutung
8 bu tavγač kün-tä män yaqšidu tutung qy-a bitiyük män
9 küskü yil bišinč ay biš yangı uluγ yangı kün-tä qulut
10 küskü yil bišinč ay altı ygrmikä bu tavγač **kün-tä** (..)

11 män yaqšidu tutung qy-a
12 y-a qutluγ bolzun kim-ning ög qarın-ta ünmäk
13 tuγmaq-liγ üç yirtinčü-nüng uluγ
14 abita **qur** atly varxar-ta • amru aγđinip yūkünsär •
15 ažunin tuγum-in sāmritip aγđinip tuγγali tužit-ta •
16 iduq tavγač kün-tä qulutı qul kiši yaqšidu tutung
17 iki kāzig ödig qiltim ödig ol
18 küskü yil bišinč ay bir Y[] [..][]
19 **tavγač** kün üzä **bitičim** []

1 道神足變化經
2 この漢文の卷子に私ブサルドウ = シェリが書き [奉った].
3 真である . 生は無いのである . 鼠

4 鼠年第五 この漢文の卷子に
5 漢文の卷子に書くことは地獄に落ちる所業である , と
6 考えて , 私チンツォ , アタイ , クマグが書いた . 真である . 生は無い .
7 鼠年第四月二十六日に . 僕クイシドゥ都統
8 この漢文の卷子に私ヤクシドゥ都統めが書いた . 私
9 鼠年第五月初 (旬の) 五日 (即ち) 大新日に僕
10 鼠年第五月十六日に . この漢文の [卷子] に

11 私ヤクシドゥ都統め
12 ああ幸いあれかし , 誰でも人の胞胎から現われ

- 13 生まれる者(に). 三界の大
- 14 阿弥陀窟という名の寺院で、常に登り敬礼したとき
- 15 その生趣を肥饒にし、兜率天に昇って生まれるために
- 16 聖なる漢文の卷子に、奴僕たる人、私ヤクシドゥ都統が
- 17 2行の題記をなした。記念である。
- 18 鼠年第五月 一日[に]
- 19 [漢文]の卷子に[私が書いた]

[語註]

5v1: この漢文題記はオモテ面の漢文仏典の経名『道神足無極變化經』を略記したものと思われる。おそらくウイグル時代以前に書かれたものであろう。

5v3, aṣun ärmäz: 前稿ではこの「生は無い」という表現が浄土思想に関係する可能性を指摘した[松井 2004, p.66]。しかしこの点について、山部能宜氏(東京農業大学)からは、煩惱を滅しつくした阿羅漢が輪廻から自由になって次の生を受けないという意味か、般若經典的な意味での「不生不滅」・「空」に近い「無生」を意味するか、いずれかの可能性の方が高いというご指摘を個人的に頂戴した(2004年12月)。山部氏のご教示に深謝する⁽³⁾。

5v6, atay: 語頭はX- のようにもみえるので前稿ではあえてQurayと読んだが、やはり頻出する人名に改める。シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書に属する4bKr 33にも同名人物がみえる[松井 2004, pp.54, 66]。

5v7: この行は上下逆に書かれている。

5v9, uluγ yangī kūn: この「大新日」は5月5日すなわち端午の節句にあたっているが、あるいは仏教的な齋日を意味する可能性もある。BBAW所蔵のウイグル文『北斗七星延命經』(U 4709)の奥書にも ¹kui šipqan-liγ ud yil altinč ²ay bir yangī aγir uluγ posad bačaγ ³kūn üzä 「癸丑年第六月初(旬)の一日(即ち)重大なる齋日に」という年月日記載がみえる[BTT XIII, Text 43]。

5v12, ög qarın: = chin. 胞胎[Uigurica II, p.44]。

5v14-15: 銘文執筆の契機を記すこの2行は4節の頭韻詩をなす：abita qur atly varxar-ta / amru aγdīnīp yūkūnsār / aṣunīn tuγum-in sāmritip / aγdīnīp tuγγalī tuḗit-ta。末節では頭韻をふむため tuḗit-ta 「兜率天に」を節末に配している。

(3) なお山部氏からは、トヨク石窟第42窟は浄土經典との関係は希薄であること [Yamabe 2002; Yamabe 2004]、阿弥陀は大乗仏典で幅広く用いられる仏名であり、「阿弥陀窟」が頻見するからといってシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書を浄土思想と結びつける必要はないこと、をもあわせてご指摘いただいた。従って、拙稿[松井 2004, p.67]で「阿弥陀窟寺」をトヨク所在と推定した際、トヨク石窟第20窟・第42窟の仏教壁画に浄土經典の影響が濃いという宮治昭説を援用した点については再検討の必要があるむね、読者の注意を喚起しておきたい。ただし、前稿[松井 2004, p.62]に掲げた諸点からは、シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書および「阿弥陀窟寺」がトヨクに由来したことは確実である。

5v15a, aʒunĭn tuɣum-ĭn: < aʒun tuɣum(~ tuɣum aʒun)「生趣」[ED, p.470; DKPAM, pp. 236, 277]. 本処では来世を含意するものか .

5v15b, tuɣɣali: - ɣali の部分は不鮮明である .

5v16, qulutĭ qul: 一人称謙讓代名詞 qulut(i)「奴, 僕」は qul「奴婢, 奴僕」からの派生語である[BTT III, pp.57-58]. 本処では両語を重ねてより謙讓の意を強調したものと思われる . この qulutĭ qul という表現は, やはりシヴシドウ・ヤクシドウ関係文書に属する 4bKr 36v (lines 1, 2)にも現われる .

5v18, bir Y: bir yangĭqa 「初(旬の)一日に」もしくは bir ygrmikä 「十一日に」のいずれか .

Дх 3654 verso

[写真] DhSPB 11, p.15.

[備考] 漢文仏典『放光般若經』(T. Vol. 8, No. 221, 025a23-025a30)紙背の二次利用 . 漢文仏典と同方向に記されたウイグル文・漢文各 1 行をそれぞれ A, B とし, その後に直角方向に書かれた書簡の草稿 5 行を Lines 1-5 とする .

A bu tavɣač kün-tä män yaqšidu šinvapdu šilavanti ödiglätim

B 弟子善法奴尸羅萬常書寫受也真彼

1 äsän čim-kä inim tükäl-ä

2 -kä tuɣmiš-a-qa ävtäki barinč

3 qiz-qa män kimqaŋu šilavanti

4 qizil-taqi buyan ortoq

5 aytu iturmän

A この漢文の卷子に私ヤクシドウ, シンヴァブドウ律師が記した .

B 弟子の善法奴尸羅が萬常書を書き奉った . 真である .

1 エセンチュムへ . 我が弟テュケレ

2 へ . トウグミシャへ . 家族の者 , バリンチ =

3 = キズへ . 私キムカドウ律師が

4 峡谷の福德の分け前 (をもって)

5 お伺い致します .

[語註]

7vA, šinvapdu šilavanti: šinvapdu < chin. 善法奴 . このシンヴァブドウ律師(šilavanti <

skt. śīlavant)は漢文題記の筆者「善法奴尸羅」と同一人物であろう。次註も参照。

7vB: この漢文の書体はきわめて稚拙であり、筆者の善法奴尸羅 = シンヴァブドゥ律師が日常的には漢字ではなくウイグル字を利用していたことは確実である。また、シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書をはじめウイグル文題記に *ödig bitiyü tägintim* (*ödig bitidim ~ ödig qiltim, etc.*) *čin ol* 「私は記念を書き奉った。真である」という表現が頻見することを考慮すると、本処の「弟子善法奴尸羅，萬常書寫受也。真彼」という漢文は，*titsi šinvapdu śīla ödig(?) bitiyü tägintim čin ol* 「弟子シンヴァブドゥ = シラが記念(?)を書き奉った。真である」というウイグル文に由来すると考えられる。ただし「萬常書」が *uig. ödig* 「記録，記念，題記」[松井 2004, p.47]に相当するかは不確実である。一方「寫受也」のうち「寫」= *uig. bitiyü < v. biti-* 「書く」の対応に問題はなく、ウイグル語仏教文献には漢文原典の「受」を *tägin-* によって訳出する例が頻見する [Uigurica II, p.13; 百濟 1978, pp.81-84; 百濟 1984, p.72; 百濟 1986, pp.162-158; Tattvārthā II, p.350; BTT XX, pp.177-178; 庄垣内 2003, p.364]。Uig. *čin* は漢語「真」からの借用語であり [ED, p.424]，漢文仏典の「彼」が *ol* (三人称代名詞・指示代名詞)とウイグル語訳される例も頻見する [e.g. BTT XX, p.171]。ただし，*bitiyü tägintim čin ol* 「私が書き奉った。真である」という場合の *tägin-* は「受ける」ではなく謙譲を示す補助動詞であり，*ol* は繫辞 (copula) 「～である」の機能を果している⁽⁴⁾。つまり，ウイグル語を母語とする筆者シンヴァブドゥ律師は「受」「彼」など漢語本来の字義には精通していなかったものの，自身の(おそらく仏教漢語のウイグル語訳上の)知識を用いてウイグル文を機械的に漢語に置き換えたと考えられ，本処の漢文はいわば「ウイグル文直訳体」構文をもつとみなせよう。BBAW所蔵のウイグル語仏典断片 U 1568 (Zieme 1978, p.85)には「此法友鉢? 明奴? 都通 / 寫受真彼印」という漢文題記がみえ，これも末字の「印」⁽⁵⁾を除けば *bu nomdaš qomidu(?) tutung bitiyü tägintim čin ol* 「これは法友コミドゥ (鉢? 明奴?) < *uig. Qomidu < chin.* 光明奴) 都統が書き奉った。真である」というウイグル文からの「直訳体」構文とみなせる。同じく BBAW所蔵の『千字文』断簡 (Ch/U 8152)にも「余勝泉都通受也」「尚泉沙弥受」という漢文題記 [西脇 1997, p.103 & pl.20; 西脇 2002, pp.77-79]がみえ，前者を西脇は「余れ勝泉都通，受くる也」と訳したが，これらの題記もそれぞれ *män šingtsüin tutung tägintim* 「私シングツイン (Šingtsüin < 勝泉) 都統が (書き) 奉った」*šangtsüin šabi tägintim* 「シャングツイン (Šangtsüin < 尚泉) 沙弥が (書き) 奉った」というウイグル文に再構すべきである⁽⁶⁾。

7v4-5, qizil-taqi buyan ortoq aytu iŧürmân: 本処の *qizil ~ qisil* 「峡谷」は，具体的には，「阿弥陀窟寺」をはじめとする石窟寺院が散在し，シヴシドゥ・ヤクシドゥらのウイグル仏教徒集団の活動の中心地となっていたトヨク峡谷 (*Tiyoq qisil*) を意味すると考えられる [松井 2004,

(4) 大英図書館所蔵のウイグル文『観音經相應』では，繫辞としての *ol* が，正しく繫辞の機能をもつ漢語「是」により漢訳されている [庄垣内 1982, pp.18, 80-81]。

(5) 末字の「印」はおそらくウイグル語原文の漢訳ではなく，捺印の代替であろう。

(6) Abdurishid 「ウイグル語訳『千字文』について」第42回羽田記念館講演会，1999年11月20日。

p.63]. この書簡草稿部分の筆者キムカドゥは、仏教聖地としてのトヨク峡谷に参詣・滞在しており、その仏教的善行による功德・福德を宛先に挙げられた家族たちにも廻向しようとして書簡を準備したと推測される⁽⁷⁾. Zieme [1995] が公刊した BBAW 所蔵のウイグル語書簡 Ch/U 7426v (line 3) にも buyan ortoq aytu idurmän という表現が在証される⁽⁸⁾. これを Zieme [1995, pp.3-4] は “(Many times) asking for bliss and partner(ship), I send(this message)” と訳す. しかし、本文書の作成の動機が上述したようなものであれば、やはり buyan (< skt. punya) 「福德」と ortoq 「仲間、パートナー、共同」とが熟して仏教的な「福德の分け前」を意味しているとみなすべきである [cf. 森安 1985, pp.80-81, 85]. 書簡の定型的挨拶表現である aytu idurmän には「お伺い致します」という総訳を与える [吉田・森安 2000, p.168, n.6]. なお、本処の aytu idurmän 両語中の -Y- 字は、いずれもまず -W- と誤記した後、左側に独立形の Y 字を追加して修正している.

おわりに

前稿で58点としたシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書は、本稿で9点が追加され、合計67点(断片を接合すれば56件)まで増加することが判明した. また本稿で追加した5件の校訂テキストからは、シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書がトヨク石窟の「阿弥陀窟寺」で日常的に活動する仏教徒集団により作成されたことを再度確認できた. さらに頭韻詩や、「ウイグル文直訳体」漢文、書簡の定型的書式など、彼らウイグル仏教徒が有していた文化的諸要素を看取し得た. これらの諸点は、未公開のシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書の原文書調査とテキスト校訂に際しても歴史学的分析の契機を提供するであろう. さらなる調査・研究を将来の課題としたい.

略号・文献目録

- BBAW: Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Akademienvorhaben Turfanforschung.
 BTT III: S. Tezcan, *Das uigurische Insadi-Sūtra*. Berlin, 1974.
 BTT XIII: P. Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*. Berlin, 1985.
 BTT XX: P. Zieme, *Vimalakīrtinirdeśasūtra*. Turnhout (Belgium) 2000.
 ED: G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkic*. Oxford, 1972.
 DhSPb: 『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻(*Рукописи из Дуньхуана коллекции Санкт-Петербургского Отделения Института Востоковедения Российской Академии Наук*)』 1-17. 上海古籍出版社 / 俄罗斯ийской Академии Наук, 1992-2001.
 DKPAM: 庄垣内正弘・L. トゥグーシェワ・藤代節 『古代ウイグル文 Daśakarmaphāvadānamālā の研究』 松香堂, 2000.

(7) BBAW 所蔵のウイグル語書簡 U 5977 にも、断片的ながら ³aryatan-taqi buyan [] ⁴idurmän 「阿蘭若の福德 送ります」という表現がみえる. buyan の直後の缺落部には ortoq を補えよう.

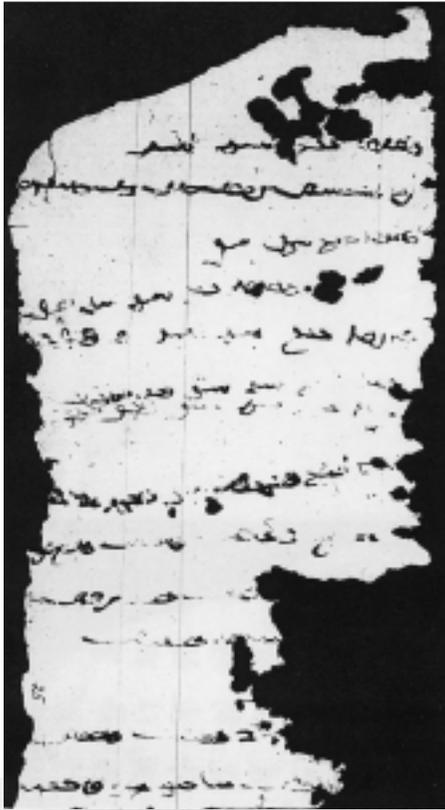
(8) 本文書オモテ面の漢文仏典は『優婆夷淨行法門經』(T. Vol. 14, No. 579, 957a28-957b07) に同定される. Cf. Zieme 1995, p.1.

- 百濟 康義 1978: 「五十二心所を説くウイグル訳アビダルマ論書断片」『印度学仏教学研究』26-2, pp.81-84.
- 百濟 康義 1984: 「ウイグル訳『阿毘達磨俱舍論』初探」『龍谷大学論集』425, pp.65-89.
- 百濟 康義 1986: 「天理図書館蔵ウイグル語文献」『ビブリア』86, pp.180-130, +4 pls.
- 松井 太 2004: 「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とトヨク石窟の仏教教団」森安孝夫(編)『中央アジア出土文物論叢』朋友書店, pp.41-70.
- 森安 孝夫 1985: 「ウイグル語文献」山口瑞鳳(編)『敦煌胡語文献』(講座敦煌6)大東出版社, pp.1-98.
- 西脇 常記 1997: 『ベルリン・トルファン・コレクション漢語文書研究』京都大学総合人間学部.
- 西脇 常記 2002: 『ドイツ将来のトルファン漢語文書』京都大学学術出版会.
- 庄垣内 正弘 1982: 『ウイグル語, ウイグル語文献の研究 I』神戸市外国語大学外国学研究所.
- 庄垣内 正弘 2003: 『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究』京都大学大学院文学研究科.
- SPF: Санкт-Петербургский Филиал Института Востоковедения Российской Академии Наук.
- T: 高楠順次郎(編)『大正新脩大藏經(*Taishō Tripitaka*)』大正新脩大藏經刊行会.
- Tattvārthā: 庄垣内正弘『古代ウイグル文阿毘達磨俱舍論実義疏の研究(*Studies in the Uighur Version of the Abhidarmakośabhāṣya-ṭīkā Tattvārthā*)』I-III. 松香堂, 1991-1993.
- Uigurica II. By F. W. K. Müller. *Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften* (Phil.-Hist. Klasse) 1910-3.
- Yamabe, N. 2002: Practice of Visualization and the *Visualization Sūtra*. *Pacific World* 3-4, pp. 123-152.
- Yamabe, N. 2004: An Examination of the Mural Paintings of Visualizing Monks in Toyok Cave 42. In: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan Revisited*, Berlin, pp.401-407.
- 吉田 豊・森安 孝夫 2000: 「ベゼクリク出土ソグド語・ウイグル語マニ教徒手紙文」『内陸アジア言語の研究』15, pp.135-178.
- Zieme, P. 1978: Materialien zum uigurischen Onomasticon, I. *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* (1977), pp.71-86.
- Zieme, P. 1995: An Uigur Monasterial Letter from Toyoq. 『内陸アジア言語の研究』10, pp.1-8, +1 pl.
- 付記** 本稿は科学研究費(若手研究(B)・基盤研究(B))・三菱財団人文科学研究助成・学術国際振興基金(A-1-1)による研究成果の一部である。

Supplement to the Uigur Documents Related to Monks Sivšidu and Yaqšidu.
Dai MATSUI

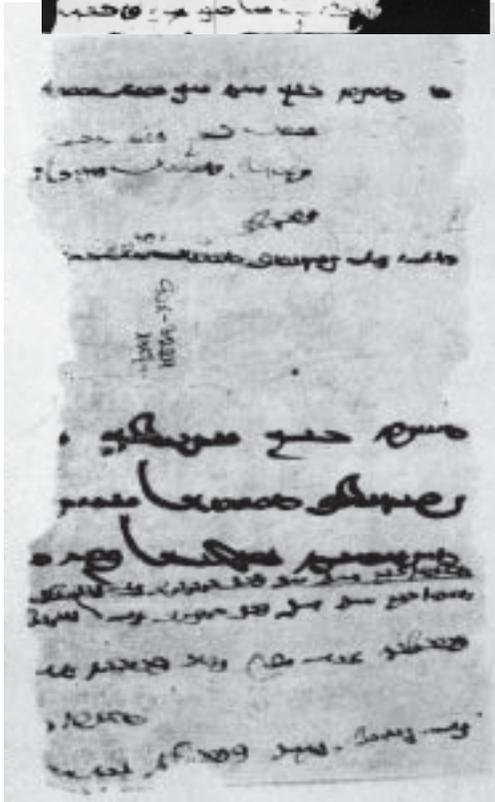
Summary: Recently I presented an article dealing with fifty-eight Uigur documents related to Buddhist monks Sivšidu and Yaqšidu, who belonged to the Buddhist monastery of the Toyoq Caves (Dai Matsui, "Notes on the Uigur Secular Documents from the St. Petersburg Collection." In: T. Moriyasu (ed.) *Papers on the Pre-Islamic Documents and Other Materials Unearthed from Central Asia*, Kyoto, 2004, pp.41-70) In this paper, I supplement the fifty-eight documents with other nine fragments which are also related to the Buddhist monks and the Toyoq Caves.

Plate I



3Kr 7-25 verso

(Reproduced by permission of the Toyo Bunko)



Dx 3224 verso

(after DhSPb 10, p. 230)

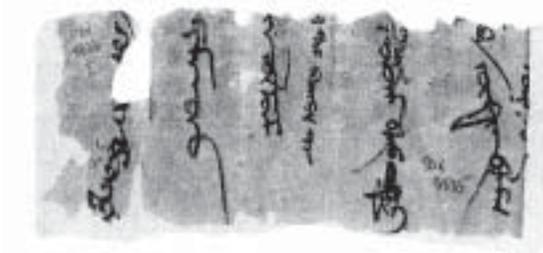
Plate II



Дх 3225 verso
(after DhSPb 10, p. 230)



Дх 3226 verso
(after DhSPb 10, p. 231)



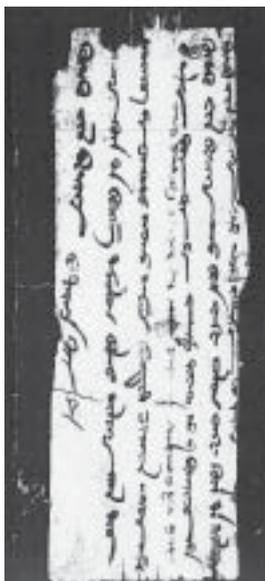
Дх 9535 + 9536 verso
(after DhSPB 14, p. 173)

Plate III

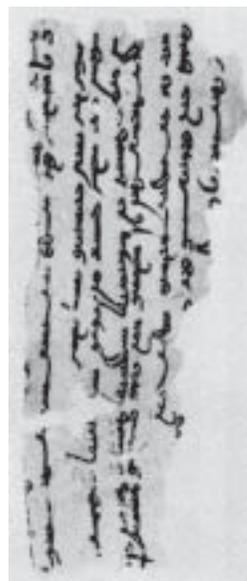
Дx 12145 + Kr IV 252 + Дx 3650 verso



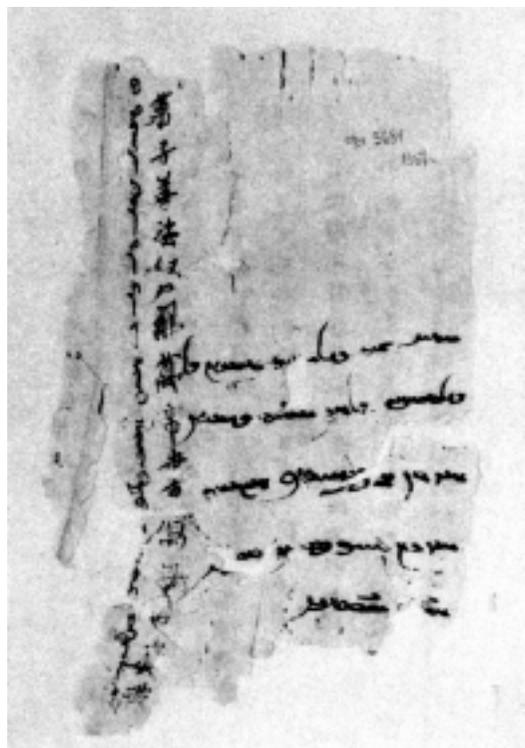
Дx 12145
(after DhSPB 16, p.46)



Kr IV 250
(Reproduced by permission
of the Toyo Bunko)



Дx 3650
(after DhSPB 11, p. 12)



Дx 3654 verso
(after DhSPb 11, p. 15)